

1-1. (X)HTML+CSS を用いて Web リソースを作成すること

構造と見た目を (X)HTML と CSS に分離することが Web Standards への準拠の足がかりです。

本書で取り上げる Web Standards という概念ですが、それは一体どういうものでしょうか。The Web Standards Project という団体が Web Standards の普及を推進しており、FAQ [Japanese Translation] にてその定義が示されています。以下、簡単に抜粋して解説します。

Web Standards は WWW (World Wide Web) で標準的に利用される技術で、W3C Standards や ECMA Standards など、複数の団体が策定する指針によって構成されています。W3C (World Wide Web Consortium) や ECMA (European Computer Manufacturers Association) は団体名で、ISO (国際標準化機構) のように、標準化活動を推進する団体です。(ISO 自身も Web Standards に関する仕様を担う団体です。)

HTML、XML、XHTML、CSS、DOM など、WWW における情報提供に関する仕様は W3C Standards に含まれており、本書ではその中でも「Web ページによる情報提供」に主眼を置き、HTML、XML、XHTML、CSS について触れています。(以降、本書における Web Standards への準拠とは、「Web ページによる情報提供」におけるものを指します。)

さて、文書構造をマークアップし、WWW に公開するための言語としては HTML、XML、XHTML の 3 つがありますが、どれを選択すべきでしょうか。

結論を先に言うと、現時点での Web ページによる情報提供という目的に対する解としては、XHTML を選択すべきです。XHTML は拡張性に優れ、モジュールなどの追加を行うことができます。これは XML においても言えることですし、XML では更に自由な拡張を行うことができますが、DTD (文書型宣言) や名前空間を独自に宣言・指定する必要が生じたり、また求められる知識が多くなったりします。

XHTML では DTD が W3C によって定義されており、また名前空間も固有のものを指定するため、XML を習得するよりも比較的敷居が高くなく、同様に情報を受け取る側も手軽に受け取ることができます。また、XHTML は HTML を XML で再定義したものであるため、HTML に慣れ親しんだ情報作成者には更に敷居が低くなることでしょう。(だからと言って、XHTML 以前の HTML では拡張性が無く、今後の発展も無いから駄目だということでもありません。SGML ベースである HTML は 4.01 で最終バージョンとなっているので、新しい技術をどんどん取り入れるよりも既に習得した知識で対応したいという場合や、文書の永続性を考えるような場合なら、XHTML ではなく HTML 4.01 を選択するのもまた 1 つの正解なのです。)

ここで重要なのは、単に HTML や XHTML でマークアップした文書を作成して公開すれば、それが Web Standards に沿った Web ページなのか、ということです。Introduction to HTML 4 の 2.4.1 Separate structure and presentation に、プレゼンテーション的な要素や属性は他の方法、特にスタイルシートに置き換えられていくと示されているように、構造と見た目を (X)HTML と CSS に分離することが Web Standards への準拠の足がかりとなります。以降、本書では XHTML を中心に述べていきますが、Web Standards に対する考え方は HTML も XML も同じであることは覚えておいてください。